

## 展望 「アメモジリ」

水辺あお

高校生のとき、日本史の授業中に突然あてられた。資料集にある「貧窮問答の歌」を音読せよという。「風マジリ 雨フルヨルノ 雨マジリ」「雪フルヨルハ スベモナク 寒クシアレバ」と私は読みはじめた。途端、「これは何調だ?」と。「五七調です」と応え、と、「今、どう読んだ」と。ぬきうち試験を受けた感じだった。

その後、「雨降る夜の」の「夜」は「よ」と読むことを知り(資料集にルビはなかった)、「五六調ではないか」と戸惑った。小学館『日本古典文学全集』などでは「雨布流欲乃」とあり「欲」は「よる」ではなく「よ」となっている。「目」を「めー」などと長音にすることもあり、「よ」も「よー」と長音にするのかもしれない。

それは別の課題として、そもそも日本史の資料集に「貧窮問答の歌」がなぜ載っていたのかといえば、作者の山上憶良の見た班田農民の衣食住の様子や、里長の任務などを理解させるためらしい。

確かに憶良の歌は万葉集のなかでも異色だ。

万葉集は多く相聞歌、挽歌のほか雑歌と呼ばれる宮廷、行幸、宴会、自然などの歌が中心であり、「貧窮問答の歌」のように、社会の矛盾を突いた歌はあまりみない。

とはいえ、万葉集の歌自体が「妻問い」はじめ当時の風習を伝える重要な史料になっている。そして個々の歌というより、歌の集合体である万葉集そのものが記紀などの当時の官製の歴史叙述の矛盾を突いていたのではないかという説も多い。たとえば有間皇子、大津皇子、長屋王といった謀反人として処罰された皇子たちと彼らを追慕する人々の歌がなぜ残ったのだろう。家持の父である大伴旅人や憶良の「梅花の宴」などは、長屋王の変と表裏一体をなしており、当時の権力争いの内情を今日に伝える。

万葉集の編者が誰かは議論があるが、藤原氏の権謀術数によって滅ばされてしまった大伴氏関係者の歌が多いのは確かだ。家持、旅人、大伴坂上郎女らの歌数は群をぬいている。現在全20巻約4500首ある万葉集の最後の歌は、編者の一人とされる家持の歌だ。

あたら  
新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや  
しけ吉事よこごと

「新年を迎え、初春も迎えた今日の日に降る雪のように、良いことも数多く積もれ」と、慶事を願う歌だ。万葉集最後の歌だが、実は家持はその後も宮廷官僚として重きをなした。ときに藤原氏との権力争いにも関わり、昇進と左遷をくりかえし、最後は蝦夷征伐の責任者として亡くなった。

万葉集最後の歌が天平宝字3年(759)であり、逝去は延暦4年(785)。その間26年、家持は歌を全く詠まなかったのか、詠んだが所在不明なのか、誰かに廃棄されてしまったのか、不明である。しかも家持は没後に藤原種継暗殺事件への関与が問われ、埋葬が許されず、官籍から除名された。のちに復権するが、痛ましい歴史である。

かつて正岡子規は万葉集の個々の歌を高く評価し、その調子のよさ、簡浄、荘重をはじめ主に巻16にある滑稽などを絶賛した。こうした個々の歌の評価は今後も高まるだろう。他方、万葉集には当時の政治をめぐる様々な解釈が縦横に織り込まれているという。今後、万葉集編纂の時代背景と意味が再吟味され、個々の歌の解釈もさらに深まっていくのではないか。